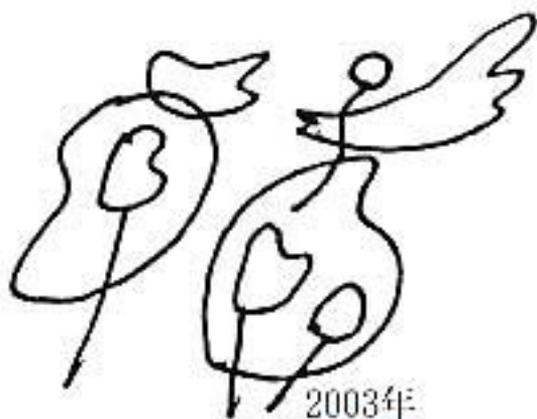


空



2003年

SORA 2号

晴夜 (2)

柴田 佐知子

音の無き水面恐ろし蛇莓

一「ウエツプ俳句通信」十四号より

跡継ぎは海市に入りてそれつきり

掌の皺に入るほどの種蒔きにけり

陵は永遠に封じて山桜

血しぶきの混じりてゐたる桜かな

父ははのめでたく老いぬ八重桜

筒鳥のこゑに背中を叩かれし

荊冠

荒井千佐代

手鏡の曇つてきたる桜かな

沈丁の闇に止まりし男下駄

二人ゐて老いすすみゐる蝶の昼

ちちははの遺影の前の朝寝かな

春満月青磁の壺に骨細る

父逝きてうから諍ふ風の麦



桑の実や胸にをさむる術知らず

「知恵の書」を読む緑陰の石の椅子

万緑に首の据れる赤子かな

野に放つ十人の児や夏ひばり

黒猫の茅の輪を一瞥して過ぎし

彦山が茅の輪の中に尖りけり

差す潮の砂に消えたる花とべら

日曜学校木椅子に夏帽重ね置き

南風や主の荊冠を外しやらむ

保育所に勤め始めて五年、空句会に参加させて頂くようになって四年。どちらも今は、私と私の俳句にとって無くってはならないものとなった。

園児たちとの触れ合いから、また空句会での良い刺激から生まれてくるものを句にまとめてみた。今回より「空」の仲間となれた喜びでいっぱいである。

尺の藤

高 千夏子

尺の藤亡命露人いまに棲み

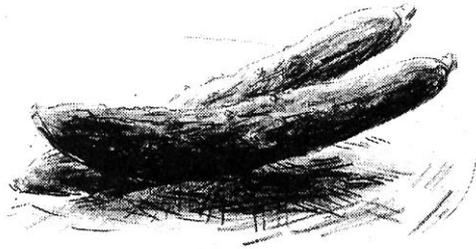
薔薇屋敷過ぎてこちらは猫屋敷

春服に地下鉄の風ビルの風

防空壕跡それとなくえごの花

森深くため息に似てえご散れり

鯉のぼりフオツサマグナを泳ぎをり



竹秋のここに丸形ポストかな

にはとりが長鳴き競ふ芒種かな

夏大根腹蔵のなき辛さなり

さくらんぼ兄の尻取り「ん」で終はり

狭山茶摘み五句

茶を摘むやトトロの森の風受けて

一芯二葉寸そろひたる茶を摘めり

摘みし茶のすぐひなひなと乾きをり

茶殻をも食べよと新茶淹れ呉れし

古茶渋く板東武者の味したり

昔、世田谷に住んでいた頃、近くに亡命露人が何人か暮らしていた。

ファッションモデルだった、ヘレン・ヒギンスの母親もその一人。私の幼馴染みの兄嫁の親も、そうした人だった。

最近この友と四半世紀ぶりに連絡が取れ、兄嫁の方のその親御様がまだご健在と聞いた。皆、一様に灰色の瞳を持ち、どこかに憂愁を湛えて暮らしていた。そして、人嫌いが多かったようだ。三鬼の「ワシコフ」のように……。

春
雷

小林朱夏

命綱手繰り寄せては春を待つ

永き日の大学病院へ一步一步

啓蟄や癌細胞の現るる

遠霞癌の告知は夢か現か

日常の景が一語に冴返る

一斉に炎となりし牡丹かな



目を逸らし会話続かず霞草

春雷やカルテは異国文字ばかり

春灯下眠れぬ人を思ひをり

手術受くる母は春野に居てほしき

病室に日永の果ての夕日かな

傷の手を温みし水に浸しけり

ひとり摘む土筆野母へつづきけり

トンネルの先に小さく春の海

衣食住足りて五十路の弥生かな

母のいないこの世など考えられないことでしたが、私に孫が生まれた頃からでしようか自然と受け入れられるようになりました。

七十歳を機に母は髪を染めるのを止める決心をしました。それから四年、母は癌の告知を綺麗な白髪と桃色の頬で受け止めています。

さくら

十河波津

寒明の鯉の目そろふ水の上

着ぶくれし背に經典の喝賜る

あの世もこぐ自転車磨く日永かな

甘酒のとろり遠山遠がすみ

街道にかけこみ寺や春北風

名刹の不許の門とお涅槃会



みづからの光に涅槃したまへり

涅槃図を抜け出て咳をこぼしたる

母娘にて洗ふ墓あり花櫛

白木蓮や脳の迷路に風通す

武者返しゆるみもなくて葦草

夕桜阿蘇より高く天守閣

大空を真中に据ゑし花筵

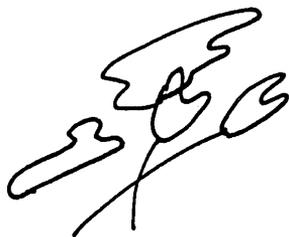
産土に住み朝ざくら夕ざくら

行く春や灯を入れてより天守閣

医師からメヌエール病は老人の証拠と
軽くないなされてしまいました。

帰途、路傍の草と見ていたクローバー
を手にいっばいみました。

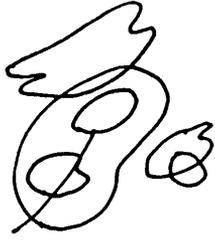
帰りつくと萎れていましたが、水を
たっぷりかけてガラスのコップにあふれ
るように活けてみました。どうでしょう、
葉も花もいきいきと立ち上がってきたで
はありませんか。何と美しい花だろうと
見ております。



海 の 斑

高 村 淳

花散るや磴を数ふる遊びして
瀬戸内の海の斑見えて葱坊主
牽かれゆく牛の踏んばる花菜照り
貌出してすでにするどき蝮蛇草
剪定の男まさりの音なりし
会うてすぐ抱きあぐる嬰芝ざくら
高め合ふ蓮の巻葉となりてより



蠍 螂

吉 田 龍

地図の上蠍螂佐渡へ足伸ばす
脚さする我を見てをり青蠍螂
籐椅子につかまり試歩を始めたり
目を閉ぢてゐても芒の中をり
投葉をひとつ増やして冬に入る
独り居の小さき聖樹眩しめり
白息と共に感謝をとどけたり